
 学 会 記 事

第53回膠原病研究会

日 時 平成4年6月10日(水)
午後6時～
場 所 有壬記念館

一 般 演 題

1) SLE 患者血清中のリボソーム構成成分に対する抗体の臨床的検討

佐藤健比呂・渡辺 武
伊藤 聡・佐伯 敬子
本間 智子・小澤 哲夫
菊池 正俊・中野 正明
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)
内海 利男・木南 凌 (同 第一生化学)

【緒言】SLE では、血清中に種々の自己抗体が検出され、核成分に対する抗体の他に、細胞質成分、特に、リボソームに対する抗体が検出されることが知られている。真核細胞のリボソームは、40S 小亜粒子と 60S 大亜粒子から構成される巨大複合体で、約80種類の蛋白質と4種類の RNA が存在するが、自己抗原となるのは、ごく限られた成分である。蛋白質成分では、大亜粒子の PO, P1, P2 の3種類の酸性蛋白質(以下P蛋白質)と L12, ならびに小亜粒子の S10 が、RNA 成分では、5キロボースからなる 28SRNA の一ヶ所の活性部位、塩基1944から2002部位の59塩基領域(28S)が自己抗原であることが判明している。

【対象・方法】活動期 SLE 90例を対象として、ウェスタンブロット法と免疫沈降法を用いて、これらの抗体を測定した。

【結果】抗 P, 抗 S10, 抗 L12, 抗 28S は、それぞれ、38, 28, 2, 15例で陽性であった。なお、他の膠原病30例、健康成人15例では、いずれの抗体も検出されなかった。抗 P, 抗 S10, 抗 28S の有無で、腎障害の頻度に差はなかったが、いずれの抗体も、皮膚症状を認めた例に出現頻度が高かった。また、器質的精神障害と抗 Pに関連はなかったが、経過中にいわゆる機能的な精神障害を示した5例全例に、治療前、精神症状発現時ともに抗 Pが検出され、うち3例は抗 28S も陽性であった。一方、抗 28S および抗 L12 陽性例は、全て抗 Pが陽性であった。

【結語】リボソーム構成成分に対する抗体は、SLE に

特異的かつ高頻度に検出され、皮膚症状と関連した。さらに、抗 P と抗 28S は、精神症状の指標と考えられた。抗 28S 抗体は、非特異的に RNA を認識する抗体とは異なり、抗 P と共存することから、抗 28S と抗 P 陽性 SLE 群の存在が明らかになった。

2) 慢性関節リウマチ(RA)に伴った心筋炎の1例

山本 尚・岡田 義信 (新潟県立がんセン)
斉藤 征史・堀川 紘三 (ター新潟病院内科)

症例は40歳の女性。平成1年より RA として当科外来にて非ステロイド剤を投与されていたが、平成3年4月末より関節痛の悪化、38°以上の発熱を生じ、6月1日当科入院した。ステロイド剤の投与により、速やかな解熱、症状の改善をみたため、7月16日に一時退院した。9月にステロイド中止と同時に再び発熱、関節痛を生じ、10月2日再入院した。炎症反応の陽性化と心電図にて低電位、陳旧性心筋梗塞様所見、重篤な心室性不整脈(VT)、UCGにて拡張型心筋症様所見を認め、心カテを施行した。冠動脈造影は正常であったが、左室のびまん性の壁運動低下、左室心筋生検にて円形細胞浸潤、心筋細胞の一部脱落が認められ、心筋炎と診断した。臨床経過などより、RAによる心筋炎と考えられた。ステロイド剤の再投与により炎症所見は速やかに消退したが、VTは難治性であった。RAによる心筋炎は稀であり、生前診断された例は非常に少ないため、ここに報告する。

3) 悪性組織球症類似像を呈した Ki-1 リンパ腫

根本 啓一・本間 慶一
大西 義久 (新潟大学第二病理)

Ki-1 リンパ腫は腫瘍細胞が Ki-1 抗原(CD30)陽性を示すほか、特異な細胞形態とリンパ節における浸潤様式を特徴とする悪性リンパ腫である。今回、悪性組織球症(MH)に極めて類似した臨床像を呈した Ki-1 リンパ腫の3例を経験したので、その臨床病理像を報告した。

症例は69才、65才、64才といずれも高齢者で、全例に発熱、肝脾腫、血球減少、肝機能異常を認め、経過中、高度の黄疸、DIC、肝機能不全、腎不全を呈し、それぞれ、3, 4, 7ヶ月の経過で死亡した。

解剖の結果、腫瘍細胞浸潤はほぼ全身性にみられ、小結節性病巣を形成、滲出性病変、組織壊死を伴っていた。また、腫瘍細胞は多核巨細胞を混じり多形成を示し、一部

細胞は赤血球を貪食し、Ki-1 (+), Len M₁ (+) であった。

前述の臨床所見は MH と極めて類似していたが、MH とは以下の点が異っていた。① 結節性病巣を形成。② 腫瘍細胞とマクロファージ間に移行像なし。③ 腫瘍細胞は Len M₁ を除き、単球・マクロファージ系マーカーは陰性。④ 特異なリンパ節組織像などである。一方、組織像はホジキン病にも類似していたが、ホジキン病とは臨床像が全く異っていた。

Ki-1 抗原は HLA-DR, IL-2 receptor とともにリンパ球の活性化に関連する抗原であるが、本症例の如く、多彩な臨床像を呈した Ki-1 リンパ腫では、腫瘍細胞から TNF, IL-1 その他、種々のサイトカインが産生されている可能性がある。

4) 若年性関節リウマチの治療について — 予後との関連で —

林 三樹夫・丸山 茂 (新潟県立中央病院
小児科)

若年性関節リウマチ (JRA) のうち、思春期に発症する多関節型や思春期に全身型から多関節型に移行する例の関節機能予後は比較的不良である。思春期発症の多関節型の女児2例に Methotrexate (MTX) の少量間投投与およびブシラミンを使用し、以下の結果を得た。

1. MTX およびブシラミン投与中は関節障害の進行は少なかった。2. 効果発現は MTX がブシラミンに比し早かった。3. MTX や DMARDs は JRA 多関節型の予後を改善しようと考えた。

第54回膠原病研究会

日 時 平成4年9月9日 (水)

午後6時20分～

場 所 有壬記念館

I. 一般演題

1) ループス腎炎におけるミゾリピン (プレディニン[®]) の使用経験

伊藤 聡・長谷川 尚
渡辺 武・黒田 毅
斎藤 徳子・柄沢 良
佐伯 敬子・小澤 哲夫
上野 光博・菊池 正俊
中野 正明・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)
佐藤健比呂 (県立中央病院内科)

【症例1】21才、女性。某院で SLE と診断され、プレドニソロン (PSL) 60 mg/日を使用し、中止したが、蛋白尿が増加し、当科に入院。2.8 g/日の蛋白尿を認め、腎生検では、WHO 分類の IVc 型。PSL 40 mg を使用したが、Cr 1.6 mg/dl, Ccr 42 ml/m と腎機能が低下。ミゾリピン (MZR) を 150 mg/日で使用し、Cr 1.0 mg/dl, Ccr 73 ml/m と改善、蛋白尿も陰性化した。

【症例2】50才、女性。初回治療は PSL 40 mg/日。腎静脈血栓症を合併し、ネフローゼ状態で入院。腎生検では、WHO 類の Vc 型。ネフローゼによる凝固能の亢進が血栓の原因と考え、パルス療法後、PSL 50 mg/日を使用した。ネフローゼは持続。MZR 150 mg/日を使用したところ、蛋白尿は 0.9 g/日に減少し、浮腫も消失した。

【症例3】23才、女性。パルス療法、PSL 50 mg/日で初回治療。その後蛋白尿が増加し、抗 DNA 抗体の増加、CH50 の低下もあり、MZR 150 mg を使用したが、ネフローゼ状態となり、入院。PSL を 60 mg/日に増量した。

【考察】MZR は副作用も少なく、PSL 抵抗性のループス腎炎で積極的に使用すべきであるが、無効例もあり、使用量の検討が必要と考えられた。

2) 下腿潰瘍を主訴にした結節性多発動脈炎の1例

佐々木嘉広・藤崎 景子
松村 剛一・藤田 繁
山本 綾子 (新潟大学皮膚科)

57歳、男。平成2年11月、両下肢に網状皮斑出現。平